

この下に……

※2025年3月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべき点を指摘していただきます。

大雪に見舞われた冬だった。災害救助法が適用された地域もあり、落雪などによる人的被害も相次いだ。その時期としては10年に1度程度しか起きないような著しい低温、降雪などの可能性が高まっている場合、気象庁が6日前までに注意を呼びかける「早期天候情報」も発表された。

専門家は日本海寒帯気団集束帯（JPCZ）の影響、温暖化による海面水温の上昇で大量の水蒸気が発生したことなどを要因にあげている。年明け、青森県知事が「今回の豪雪は災害だ」と述べていたが、まさに「雪害」である。

信越地方など雪深い地方で、雪が降り積もる中でも、人々が往来

できるようにこしらえた「雁木^{がんぎ}」が思い浮かぶ。家々の軒から長く張り出したひさしだ。街道筋や商家が並ぶ通りなどに連なり、ガンが群れをなし、空を飛ぶ姿に似ていることから由来するという。

雁木は各家屋の一部であり、高さや形もさまざま。その下の通路も公道ではなく、個人所有の土地だという。歯抜けになればその部分に雪が積もってしまい、通路は機能しなくなる。雪国に培われてきた知恵や互助の精神が凝縮されている。豪雪地帯として知られる新潟県上越市高田地区には今も総延長15^{キロ}以上もの雁木の街並みが残る。江戸時代、大雪に埋もれた

街に「此ノ下に高田アリ」の高札が立てられたと伝えられる。

意も必要になる。春遠からじとは
いえ、気をつけたい。

この冬約1畝の積雪に見舞われたという同地区の古老、大仙寺住職の石川満祐さんに聞けば、過去に豪雪を経験し、慣れているとはいえ、老いの身には重荷になってきたという。「高田の南20ロほどの山あいにある寺野村(現板倉町)では、1927年2月13日に27尺(10タ)という人里での積雪記録もあります。深さ(高さ)を後世に語り継ぐと石を山形に積んだモニュメントもありますよ」と教えられた。

同地区は地すべりの常襲地でもあり、「地すべり資料館」が教訓を伝えている。いにしえから地すべりを止めるために人柱になったという言い伝えがあったが、37年には地中のかめから座禅を組んだ即身仏が発見された。以来、住民らが供養堂を立て、追悼をしてきたという。地すべりは融雪期の注